

監督回顧録

若者に伝えたい

村田恒太郎



『関西大学レスリング部50年史』の刊行にあたり、我が関大レスリング部の輝かしい歩みに心からの敬意と祝意を表する次第です。その歴史とともに、私の若き日々の思い出とをオーバラップさせて、草創の諸兄とともに、汗して、泪した、青春の昔日を想起することになります。

1. 創部への道のり

私事となりますが、明大監督、全日本監督、東京オリンピック選手強化委員長などのレスリング歴を通じて、唯一最大の思い出と言えば、躊躇なく関大レスリング草創の一頁を挙げることができ、それは私の青春の日記そのものでもあります。その50年前の諸兄の屈強な顔が今や好々爺となった現在においても、ともに想いは「一つの事」でありましょう。

昭和21年（1946）に復員して母校明治大学レスリング部の戦後の再建に取り組んでいた24歳の私にとって先輩である大阪市立中学（旧制）柔道師範であった故小田原徳善氏より、市立中学柔道部の将来を打診されたことがある。当時の日本は米国の管理下において、柔道部は廃部の処置を取られていて昭和25年までの空白期間があった。小田原氏は柔道に代わるレスリングの導入を思い立

ちその指導を私に依頼されたのである。爾来7年間の大阪生活が始まったことによって関大草創の諸兄との交流がスタートすることになる。

昭和22年8月大阪に赴任して、大阪市立中学柔道部のレスリング化を図ることとなった。時を同じくして、大阪レスリング協会を設立し、小田原会長、村田理事長のメンバーで、日本協会への登録を終えて、同年11月、第3回国民体育大会（大牟田市開催）に大阪府代表として参加する。若き日の山本、下村（現・木村正三）、安川、宇賀、木村（勝）の顔があり、当時の諸兄が関大レスリングの母体となったのである。

さて、卒業期を迎えた大阪市立中学柔道部員は、関大と明大への進路を取ることになる。当時、市立中学出身の関大生であった山本雅之が活躍して、柔道部の大半は関大へ進学することとなった。斯くして、昭和23年4月、関大レスリング部は産声を上げ、50年の歩みの第一歩が印されたのである。この草創のメンバーは主将とマネージャー兼務の山本に、予科に入学した、市立中学からの安川、宇賀（照夫）、古沢、友田、田中、東条などと、大鉄工業高校からの木村（勝）であった。昭和24年、私が、関大初代監督に正式に迎えられる。そして前年予科に入学した草創メンバーが漸制大学1年に転部して、そこに新たに市立中学から押立、黒木、木村（晴）などが加わり、さらに2年生に下村（日本大学大阪専門学校出）、宇田、梶原が編入学し、監督の私に、主将の下村、マネージャーの木村（勝）の3人体制が決まって、このような陣容を主軸として、関大レスリング部の草

創期の組織造りは完了した。

2. 脳裡に残るものは

さらに関西学生レスリング連盟を創設し、以後、関学、同志社などと覇を競いながら、関西の学生レスリングの基盤は、関大を中心にして、充実躍進を続けることになる。

さて、戦後の焼土の街に、乏しい食糧事情のなかから関大健児は、何を志し、レスリングに挑んだのか、そこに定義は必要ないけれど、草創期の群像から不思議に思えるほど楽しいことのみが脳裡に残るのである。

当時は勿論、満足な用具など無いのである。芝生の上、畳の上、やっと手に入れた帆布の粗いマット上で格闘する。身体中が赤チンだらけの赤鬼のような面々を彷彿する。形も徐々に整い、天六校舎、千里道場、西宮体育館などに草創の汗の塊を残しながら前進を続けていくのであった。「腹が減ってふらふらするから……」と安川と木村(勝)が練習を始める(?この文章は間違いではない)。「よし、死ぬまでやれ!」などと無茶を言う。そんな時マネージャーの山本が先輩知人から掻き集めた食糧の差し入れがある。彼の政治的手腕に、我々は大いに恩恵を受けたものであった。監督からは、その差し入れを眼前にして、「いまは、駄目だ!」「校舎一周してから!」の号令が飛ぶ。喰いたい一心の部員たち。その走る姿の速かったことには驚くばかりであった。

初代キャプテンの下村とは一番の思い出がある。一軍を率いる主将の実力が無ければ部員は付いてこない。短期間で監督の持っているものを、彼に、伝えてやらねばならぬ。下村を鍛えることが監督としての責務であると考えた。後年、彼は言う。「殺されるんじゃないか……」と思ったそうだ。そして「アイツを殺してやろう……」と思ったと言う。そんな激しい毎日を彼は良く耐えた。「もう俺と稽古しなくて良いぞ」と言ったことが

ある。俺は、もう、お前に残すものが無い。部の指導者としての彼の力量を認めたのである。「こんな嬉しかったことは無かった」と彼は言う。「これからは鬼監督と稽古しなくても済むんだ」と、その方が喜びだったと言った。

多かれ少なかれ草創の人々にとって、「監督は加害者」であり、「被害者は部員」であったわけである。何しろ私自身が現役のバリバリだから遠慮会釈なく叩きのめしたに違いない。

3. 関大スピリット

そんな私に50年来、変わらぬ交流を、持ち続けて頂いていることに感謝申し上げる。関大レスリング草創の人々が、卒業後はそれぞれの地域社会に在って、各自の事業を発展させ、地域の指導者としての責任を果たしていることに心から誇らしく思うものであるが、そこに在るものは、若い大切な日々において、部に対する団結と愛情、そして「己の分」を果たす責任感と不屈の精神力の涵養から生まれた、正に「関大スピリット」と言えましょう。

最後に、現役諸君に伝えたい。我々は目的を持って関大に入学した。即ち、勉学もレスリングも諸君の目的である。大学生活はたったの4年間である。その僅かな人生の時間に一意専心してその道に進んできぬ者が、卒業後の50年の人生に何が出来ようか。それは先輩の今日の姿が物語っている。身を以て教えているではありませんか。関大レスリング部員として充実した4年間の修行を終えて、この関大草創の先輩のような素晴らしい過去を持ったことを誇りとして、社会に巣立ってみたいのものである。

4. 7年間の感謝

斯くして、想い出深い大阪生活から再び東京へ戻ることになった。昭和28年12月盛大な壮行会を

催して頂き大阪を後にした。昭和24年に結婚して長女をもうけた枚方の地、再び東京へ戻っての社会人としての出発も大阪で得たものだった。

そして諸兄とともに喜怒哀楽した満腔の想い出を胸に抱きながら、私の人生の基盤はこの7年間に培われたものでありました。特に、私の監督生活を支援して頂いた故木村篤一様(木村勝の父君)には忘れ得ぬ人生の数々の教訓に接し、私の将来への指針を与えて頂きましたことを感謝しております。誌上を借りて御礼申し上げます。

物故の同志諸兄に黙禱を捧げ、残る我々には関大スピリットを持って人生を終わることになろうけれど、関大レスリング部の60周年、100周年に向けての限りなき前進を祈って、欄筆させていただきます。文中敬称を略させていただきました。(完)

関西大学レスリング部監督
 明治大学レスリング部監督
 東京五輪レスリング選手強化委員長
 勲日本レスリング協会理事長
 勲日本レスリング協会最高顧問
 (歴任)

〔編集部注解〕

村田さんは、大正11年1月1日生の、平成9年現在75歳です。ご本人によれば、「お袋は『俺』に明かす」ということで、大正10年12月20日が正しいようです。尋ねられれば、説明が面倒だから、戸籍どおりの生年月日を説明することにしてるようです。こんなことは昔よくあったことですが、村田さんらしいところは、その事実を「文章」にして告白する潔癖なところ。村田さんの近著に『俺』があります。その人となり、生きざま、思想を、ありのままにぶっつけた、「自分史」です。「一人称を統一する必要から、私、僕、吾、儂、自分、と並べてみたが一番相応しいのは『俺』という事になる。この冊子の題名は、『俺』とい

う事にした」とぶっきらぼうに「まえがき」で書名の由来を語っています。そのとおりの筆致で快刀乱麻の「世評」「人物評」「事実確認」が満載されています。さて生年月日の拘りの件ですが、それは世の中によくある履歴詐称問題を採り上げた文中での告白になっています。うっかりした善意の「思い込み」など世間にざらにあるわけで、たとえばそんな事例を楯にとって「怪文書」攻撃を仕掛ける卑怯者がいますが、『俺』はそれを弾効します。ついでに『俺』の誕生日も詐称だ、それがどうしたというわけです。村田さんは、このように、正義感の強すぎるともいえるほどに本音の固まりの人物です。その人となりを彷彿とさせる村田さんの一文を紹介しておきましょう。



甲子園では、全国高校野球が真っ盛りである。そのさなか、読売新聞の「チームのために『忍』、恐かつ男に無抵抗」の記事を読み、その事件に対して驚きどころか腹が立ってきた。一体これが正しいことだろうかと考えさせられた。

スポーツマンの血気さかんな少年野球部員は「問題を起こせばチームが出場停止になると考えて、財布を恐かつ男に渡した」という。関係の先生方は「よく我慢してくれた」とほめたということだ。

かねがね、不思議なことだと思いつつ、出場停止校(辞退校)の部員に思いを寄せていたが、一般生徒の非行でまで、当該学校の野球部が出場停止(辞退)に追い込まれるのは合点の行かぬことにはなはだしい。第一、ケンカの一つや二つの問題もない学校なんて、あるはずがない。それにしても高野連とは、大変な権力機関のように感じられて、不愉快である。

野球一筋の思い出も、青春の貴重な日々であろうが、チームのための「忍」は、一体彼らに何を教えたことになるのだろうか。人の迷惑も、人の危険も、横目で通りすぎる「忍」の人生というのでなければよいのだが……。 (村田「エッセイ」)



この「エッセイ」は、昭和52年8月19日の読売新聞「気流」欄に採用された投稿である。「会社役員・村田恒太郎・55」の「俺」が書いたものです。そのタイトルは、「恐かつに耐えた高校生・自校の野球部思い無抵抗・『忍』はき違える恐れ・出場停止措置の過剰にも問題」がすべての問題点を簡潔に要約しています。このエッセイが『俺』に回顧録として紹介されている。



ここに20年近く前の読売新聞「気流」欄に投稿した記事を見つけた。55歳というのが懐かしい。この頃、明大レスリング部の合宿に参加して仙台育英高校の道場でこの記事を見たのが思い出される。高野連が盛んに用いるのが、“教育的見地”という言葉である。詰まらん事で出場停止を言い渡された、部員や生徒の教育的見地は、どうするのであろうか、頭の固い老人の独り善がりである。(村田『俺』)



村田さんは、上記の「エッセイ」につらぬく文脈どおりの気概の人です。関西大学は、そのレスリング部草創のころから永きにわたって、村田さんのこの慈愛の恩恵をふんだんに受けております。

『俺』の発刊日は、多分、平成8年2月1日だろう。私家版なので奥付がない。そこで「あとがき」に期されている期日を探ることにしました。「反骨といえば聞こえが良いが、不細工な男だなと今更気が付いております。ストレスを感じた事がないのは鈍感なせいでしょう。笑って、飲んで、したい事(レスリング・編集部注)をして居ります。幸せな事だと思っております。敵は作らないが、相手がどうだか考えた事はありません。借金はないが、金もありません。まあどうにか74歳人並みに暮らして来られた事に感謝しております」と、その「あとがき」は結ばれてます。

とんでもありません。村田さんは鈍感どころか、大変に繊細な方です。ここ一番とか、親身になる



写真▷『俺』の表紙と明大初陣の頃の村田さん

か、伯仲しているときとか、そんなとき村田さんは人目と辺り構わず貧乏ゆすりをします。右ひざが止んだら、左あし、また右という具合です。豪胆で繊細な精神。つまりは自己にまっ正直で大上段から諸事万端に対決する正義漢なんですね。

ところで村田さんは、平成7年の秋の叙勲で、斯界に貢献された功績によって、勲五等雙光旭日章を受賞されました。その祝賀会が東京で開催されましたが、関西大学レスリング部OB会からは、清谷利次会長ほか数名が出席してお祝いを述べました。『俺』は、その祝賀会で公表されたものです。2月1日の祝賀会は、村田さんの人となりを照らして、東京の本拠地である中野区経済諸団体、日本レスリング協会、ライオンズ国際協会330-A地区の有志の面々がこぞって共催に名を連ねていますし、400名にもおよぶ参会者でまことに盛会でした。『関西大学レスリング部50年史』で、初代監督村田恒太郎先生のその栄誉を紹介させていただいて、創部以来の数々のご教導に対して、ここに改めて深甚なる感謝を申し述べたいと存じます。村田さん、有り難うございました。どうぞ、これからも「俺」についてこいと導いてください。

(完)